

## 音楽専門の教師が担う学校内音楽活動における 中核的な役割とコーディネーターとしての責任

— 全校音楽集会の指導をモデルとしてクラス授業への応用を模索した実践 —

新山王 政 和 (創造科学系音楽教育講座)

寺 島 真 澄 (岡崎市立矢作南小学校)

The center role in music activity in school that music teacher supports and responsibility as coordinator

— application to class lesson of “guidance model of whole school musical activities” —

Masakazu SHINZANOU (Department of Music Education)

Masumi TERASHIMA (OKAZAKI-Yahagi Minami Primary school)

**要約** 筆者が理想として思い描く音楽科授業の姿とは、表面的でその場限りの楽しさを負いかける「一過性の単なる遊びの場」から脱却し、ストレス・フリーに音楽の知識や知覚力を身に付け、それを使いこなして『共働・共創・共感・共有』を楽しむ場が実現されたものである。また現在筆者が最も懸念していることは、クラス担任による音楽科授業の多くでは、子ども達に「思いや意図」を持たせても、それを音や音楽によって伝える演奏表現の技術(伝える技や方法)の指導が充分に行われていないことである。

集会活動の一つとして「全校音楽集会」を定期的に開いている小学校は少なくない。しかし中には単に学芸会の予備的な位置づけで行っているものや、鑑賞教室の一つとして開催される「劇場型」のもの、単なる発表の場などに止まっているものも少なくない。そのような中、愛知県岡崎市立矢作南小学校では全校音楽集会へ音楽専門の教師(研究会や研修等で音楽部会に所属する教師)が積極的かつ戦略的に関与することで、単なる一行事から「クラスの音楽科授業では体験しにくいレベルの高い音楽活動に触れられる場」へ発展させるとともに、「音楽専門の教師による指導を見聞きしたクラス担任教師がそのノウハウをクラスへ持ち帰られるスキルアップの場」へ脱却させていた。このように全校音楽集会を学校内教育活動のコアと位置づけたことにより、音楽専門の教師による音楽レベルの質的保証と技能向上が図られただけでなく、教師のスキルアップや授業改善の場としても活用され、その効果は教師と児童の垣根を越え、さらに授業の枠も越えて広く学校内音楽活動全体へと波及していた。本報告では、この「子ども⇔子ども、子ども⇔教師、教師⇔教師」で取り組んだ「共働、共創、共感、共有」をめざした活動へ特に着目し、その概要をレポートする。

**Keywords** : 全校音楽集会, 教師のスキルアップ, 音楽科教育

### 1. 研究の背景と筆者のスタンス

総合的な学習の時間の一部とリンクさせたり学校行事の一つとして行われたりする全校音楽集会は、ゲストを学校へ招聘して演奏してもらいそれを鑑賞したり楽器に触れたりする「劇場型」や「一過性の体験型」のものが少なくない。このような劇場型や一過性体験型の全校音楽集会の意義を否定するものではないが、このタイプの活動に依存し過ぎると「誰かが、何かをするのを、観たり聞いたりした」というように子ども達をお客様気分にしてしまい、「誰が誰のために行っている活動なのか?」その主体であるべき子どもの姿や存在を見失ってしまいかねない。他方、音楽科の授業時数が実質的に削減方向へ向かいつつある将来を見据えると、今後、授業の枠内に止まって音楽を教えたり体験させたりすることには限界がある。このような音楽科を取り巻く状況を鑑みて、この全校音楽集会を

「学校内音楽活動のコア」と位置づけ、そこへ音楽専門の教師(県市レベルの研究会や研修等で音楽部会に所属するなど、音楽科を専門としている教師)が積極的かつ戦略的に関与することで、単なる一行事から「子ども達が日常的な音楽科授業ではなかなか体験できないレベルの高い音楽活動に触れることのできる場」へ発展させるとともに、「音楽専門の教師による指導を見聞きしたクラス担任教師がそのノウハウをクラスへ持ち帰ることができるようなスキルアップの場」としての機能を有する活動へと脱却することを期待している。

本報告で紹介している愛知県岡崎市立矢作南小学校(学校長:市川修)の全校音楽集会「矢南ミュージック」では、ゲストによる鑑賞教室でもなければ単なる子ども達の発表会の場に止まるものでもなく、子どもと教師がともに歌い学ぶことで互いに成長できるよう

に企図された活動を継続している。そこでは子ども達が音楽専門の教師から直接指導を受ける場面が設定されており、子ども達がより高いレベルの音楽活動を体験したり、クラス担任教師が様々な指導ノウハウを持ち帰ったりすることができるように配慮されていた。このように「矢南ミュージック」を学校内教育活動のコアに据えたことにより、学校内音楽活動全体の質的レベルの保証と技能的レベルの向上が図られただけでなく、授業改善や指導スキルアップの場としても活用され、それらの効果は教師と児童の垣根を超え、さらに授業の枠も越えて学校全体へ及んでいた。

そしてその活動では、表面的でその場限りの楽しさを追いかける単なる遊びや一過性の体験から脱却し、筆者が音楽科授業の理想として思い描いている「ストレス・フリーに音楽の知覚力（知識と技術の両面）を身に付け、それを使いこなして『共働・共創・共感・共有』を楽しむことを体感できる場」を実現し得る可能性が示唆されていた。さらに、現在筆者が最も懸念している「クラス担任教師の多くは、子ども達が抱いた思いや意図を文字や言葉によって他者へ伝えるのと同じように、音や音楽によって伝える演奏表現の技術（伝える技や方法）を、体験を通じて指導する力量を十分には持っていない」という現状を解決する方策にもヒントを与えるものであった。本報告では、このような「矢南ミュージック」の実践を取り上げ、その活動の意義について筆者による第三者的視点からの分析と考察を試みてみたい。

## 2. 全校音楽集会「矢南ミュージック」の概要

### 2.1 「矢南ミュージック」の研究的位置づけ

まず、研究の俎上に上げた矢作南小学校で実践されている全校音楽集会「矢南ミュージック」について、その概要を紹介しておく。本報告で注目している矢作南小学校では、これまで「子どもが楽しくて一生懸命になることができる学校と授業づくり」を研究テーマとして、全教科による問題解決的学習を軸とした校内自主研究へ継続的に取り組んできた（講師：藤井千春 早稲田大学教授）。これに加えて、2005年開催の全日本音楽教育研究会全国大会を見据えて「全ての教師が個々の技能を生かした授業改善」を研究テーマとした委嘱研究にも取り組んできた。このように学校全体として二つの大きな研究テーマに取り組んだことで、「心を合わせ、活動を共にする感動」と「音楽指導を教師が共有し合う場」という教育的所産を全ての教師が意識し、共有することができたようである。この二つの「学び」から裏付を得ながら継続されてきたのが全校音楽集会「矢南ミュージック」の活動である。その実践においては、音楽集会が単なる子どもの発表会やクラス担任教師の自己満足に止まることなく、「子どもと教師が共に学び合いを深めることができる

場」であることを目的として、「子ども⇔子ども」のみならず「子ども⇔教師」、「教師⇔教師」の間で「共働」、「共創」、「共感」、「共有」をバックボーンとした様々な活動が繰り広げられてきた。本報告では、この長年に亘り持続的かつ継続的に積み上げられてきた「子ども⇔子ども、子ども⇔教師、教師⇔教師」による「共働、共創、共感、共有」の取り組みへ特に注目している。

### 2.2 「矢南ミュージック」の実践が求める教師像

「矢南ミュージック」の活動では、子どもと共に学び合いを深めることができる指導者の姿を「共に学び、感動を共有する喜びを実感する教師」と設定し、さらに具体的にめざしたい教師像が次のように設定されている。

- ①子どもと一緒に音楽に夢中になることができる教師。
- ②全校音楽集会と日々の授業をリンクさせ、子どもの音楽的技術の向上をサポートしようとする教師。
- ③全校音楽集会活動を通して、子どもに対する音楽指導の技術を高めようとする教師。

### 2.3 「矢南ミュージック」の実践を進める上で設定された研究上の仮説と、施策の基本コンセプト

実践の計画立案に先立って、単に子ども達の発表や活動のみに止まることなく、「各クラス担任教師が指導技術を獲得できる場とすることも視野に入れて音楽指導に対する意欲や関心を高めるような全校音楽集会を設定すれば、教師も子どもと共に伸びたいという意欲を持つであろう」という仮説が設定されている。そして実際の施策上の基本的なコンセプトとして、次の3本の柱が考慮されていた。

- ①指導計画作成上の留意点：音楽集会で何を学ばせ、何を各クラスの日常的な授業とリンクさせるのか、その見通しを明確にする。
- ②指導内容の工夫：全校の児童が集まって活動する音楽集会において、音楽専門の教師が前に立って専門的な指導を行う場面を的確に設定する。
- ③発表の場の工夫：単なる演奏発表から脱却し、聴いている側も巻き込んだ参加型の発表を工夫する。
- ④音楽専門の教師による模範的指導を担任教師がクラスへ持ち帰ってすぐに授業に活かせるように、平易な内容の活動も盛り込む。
- ⑤音楽専門の教師による全校児童を対象とした直接指導によって、音楽レベルの質的な保証と技術レベルの向上を図る。これによって、クラス担任教師だけでは実現できなかった「音楽的によりレベルの高い活動」を子どもと教師が一緒になって楽しめるだけでなく、クラスへ持ち帰っても「結果を残せる音楽科授業」の運営へ手助けとなる集会とする。

## 2.4 「矢南ミュージック」の活動のねらいと全体計画立案の際の具体的留意点

### 2.4.1 子ども達による自主的な活動と教師主導による活動とのバランス

これまでに何度も触れたとおり、「矢南ミュージック」では、子どもの音楽的技術向上と感性の伸張を図ると同時に、クラス担任教師の指導力を向上させるスキルアップをサポートするという側面も併せ持っていた。そのため、まず初めに全校音楽集会の「ねらい」が検討された後に、年間の指導計画の策定が行われている。次に、実際の指導計画策定に先立って検討された「集会活動のねらい」を整理して紹介する。

#### ①『子どもに対するねらい』

- ・授業の枠を超えて、子どもたちが心の底から音楽を楽しみと実感できる学びの場を設定する。
- ・授業で学んだ知識や技能を活用したり応用したりすることができる発展的な学びの場とする。
- ・音楽専門の教師による専門的指導を受けることで、音楽レベルの質的保証と技能向上の支えとする。
- ・これらの目標の具現化を通して、子どもが本来的に持つ「心の豊かさ」をいっそう拡充させる。

#### ②『クラス担任教師に対するねらい』

- ・集会で取り組んだ活動やその指導方法を、クラス担任教師が学んだり試したりできる場を設定する。
- ・日常的な音楽科授業に関する基礎的な指導方法を再確認できる場であるとともに、応用的な活動や発展的な指導技術も学べる場とする。
- ・音楽専門の教師によって示された専門的な指導方法をクラスへ持ち帰ることで、音楽科授業の質的レベルの保証と技能的レベルの向上をめざす。
- ・これらの目標の具現化を通して音楽活動の指導の在り方や活動の実際を教師自身が実体験することで、音楽活動が子ども達にもたらすことのできる「心の豊かさ」を体感する。

### 2.4.2 計画立案時に検討された「手立て」

各時間の活動案や全体計画を立案する際に、具体的な施策となる「手立て」が次のように検討された。

- ・子どもを主体とする自主的な活動を教師が一步後ろからサポートする集会とする。具体的には、児童会組織である「集会委員会」による企画運営とし、学級や学年による演奏発表の場を盛り込む、そして音楽専門の教師から直接指導を受ける全員合唱の場を盛り込む、さらに集会委員の司会による「感想発表交流」の場を盛り込み、これら三つを「矢南ミュージック」の主要コンテンツとする。
- ・音楽専門の教師が中心となって子ども達の音楽活動を導き、音楽的な成長をサポートする。具体的にはオープニング・ソング（入退場時の全員合唱）である「せかいじゅうの子どもたちが」の指導、各クラスで

練習してから全員合唱する「今月の歌」の指導。この二つの場面では、各クラスにおいて担任教師が指導する際の模範にもなり得る合唱指導技術や練習方法などを音楽専門の教師が示すとともに、歌唱時の注意点を積極的に指摘することで音楽レベルの質的保証と技能面での向上を図る。これらの全員合唱の部分を、音楽専門の教師が全責任を負うコンテンツとした。

### 2.4.3 活動をサポートする教員の分業化

全校音楽集会を学校行事として定着させ継続するためには、活動内容のパターン化によって集会全体の可視性を高めて活動の流れを掴みやすくするとともに、サポーターを務める教員の分担分業化が避けられない。「矢南ミュージック」では、全体的な音楽指導を寺島教諭（音楽を専門とする教員）が担当し、全校音楽集会を企画運営する集会係の児童への指導を音楽主任（音楽を専門とする教員）が担当した。それ以外に、全員合唱時にプロジェクターで歌詞を投影する作業の全てを担当する教員、全員合唱時のピアノ伴奏を担当する教員、全体的な音響機器等の操作を担当する教員によって、集会の運営が分担分業化されていた。

## 3. 実践の概要

### 3.1 平成21年度前期指導計画の目標

次に実践の一例として、平成21年度前期（4月～9月）に実施された「矢南ミュージック」の様子を、「指導計画」に基づいて紹介する。

- ①集会の開始（入場）から終了（退場）まで全体を通して音楽活動へ夢中にさせることで、精一杯表現し、他者の演奏を鑑賞する良さを実感させ、生活をより豊かにしようとする意欲を高めさせる。
- ②各クラスの音楽科授業で身に付けた技能を發揮させる場を提供したり、集会で身に付けた技能や意欲を授業に繋げたりすることで、相互に結び付いた拡がりを見通すことのできる集会を創造する。

### 3.2 平成21年度前期活動内容の重点目標

- ①音楽専門の教師による全体指導において「歌心の向上」と「歌声指導の統一」をめざす。「歌声の響く学校」のさらなる発展を願い、共に歌い合わせる喜びが実感できるような集会づくりをめざす。具体的な活動内容とその重点目標は次のとおり。
  - ・テーマソングの歌唱：体育館への入退場時に「せかいじゅうの子どもたちが」を全員合唱する。
  - ・今月の歌の歌唱：月替わりに集会委員会で選曲し、各クラスで練習をした上で全員合唱をする。愛唱歌として皆で一緒に歌えるレパートリーを増やす。
- ②音や音楽に感じる学びの共有と言葉の学び
  - 発表コーナー（各学級や部活などによる演奏発表）では、必ず聴衆側を巻き込んだ体験的な場面を盛り込



むことで、すべての子どもに実感を伴った鑑賞をさせる。その後には必ず集会委員の司会による「感想発表交流」を行い、発達段階に応じて「感じたことを言葉へ置き換えて伝える」という「言葉による表現の学び」を共有させる。

### 3.3 平成21年度前期（4月～9月）の指導計画

2009年度上半期に実践された活動内容を紹介する。各回とも45分を原則として構成されている。

- ① 5月12日「1年生に校歌を教えてあげよう」  
（鑑賞教材）「校歌」
  - ・矢南ミュージックを楽しく学ぶ意識を高める。  
（表現教材）「校歌」
  - ・明るい響きのある歌声を出せるよう練習する。
- ② 5月19日「運動会で校歌をみんなで立派に歌おう」  
（鑑賞教材）6年生による合唱と器楽の発表
  - ・合唱部や上級生の歌声を聴き、良さを実感する。  
（表現教材）「校歌」
  - ・明るく、大きく、響きのある声を意識させる。
- ③ 6月2日「みんなで英語を楽しもう」  
（鑑賞教材）教員と有志児童による英語の歌の演奏
  - ・英語の歌を歌うことに親しむことができる。  
（表現教材）「たからもの」（本校の第二校歌）
  - ・主旋律を楽しく歌うことができる。
- ④ 6月9日「リズムを感じて動作してみよう」  
（鑑賞教材）2年生による歌唱の発表
  - ・友達の発表を鑑賞し、良さに気付き感想を発表する。  
（表現教材）「たからもの」
  - ・明るく、響きのある歌声を意識できるようにする。
- ⑤ 6月16日「リズムを感じて歌ってみよう」  
（鑑賞教材）1年生による歌唱と器楽の発表
  - ・発表を鑑賞し、良さを見付けることができる。  
（表現教材）「たからもの」
  - ・主旋律に合わせて副旋律を歌うことができる。
- ⑥ 6月23日「リコーダーの音色を感じてみよう」  
（鑑賞教材）3年生による器楽の発表
  - ・リコーダーの演奏を聴き、良さを見付ける。  
（表現教材）「たからもの」
  - ・主旋律に合わせて副旋律を歌うことができる。
- ⑦ 6月30日「リズムを感じて歌ってみよう」  
（鑑賞教材）2年生による歌唱の発表
  - ・発表を鑑賞し、良さを見付けることができる。  
（表現教材）「たからもの」
  - ・主旋律に合わせて副旋律を歌うことができる。
- ⑧ 7月7日「いろいろな楽器の音色を感じよう」  
（鑑賞教材）4年生による器楽の発表
  - ・学級発表の表現を鑑賞し、的確な言葉で評価できる。  
（表現教材）「たからもの」
  - ・ハーモニーを感じて二部合唱ができるようにする。
- ⑨ 7月14日「合唱部のお手本の歌声を学ぼう」

- （鑑賞教材）合唱部による演奏
  - ・発声のコツや美しい歌声を体感し、真似る。  
（表現教材）「たからもの」
  - ・ハーモニーを感じて二部合唱ができるようにする。
- ⑩ 9月8日「二学期も楽しく音楽を学ぼう」  
（鑑賞教材）ブラスバンド部による演奏
    - ・管楽器の音色を聴き分け、イメージを発表できる。  
（表現教材）「この星に生まれて」
    - ・旋律の流れを把握して歌うことができるようにする。
  - ⑪ 9月15日「みんなで英語を楽しもう」  
（鑑賞教材）教員と有志児童による英語の歌の演奏
    - ・英語の歌を歌うことに親しむことができる。  
（表現教材）「この星に生まれて」
    - ・主旋律を楽しく歌うことを実感する。
  - ⑫ 9月29日「3拍子のリズム感を身に付けよう」  
（鑑賞教材）4年生による器楽の発表
    - ・学級発表の表現を鑑賞し、的確な言葉で評価できる。  
（表現教材）「この星に生まれて」
    - ・ハーモニーを感じて二部合唱ができるようにする。

### 3.4 「矢南ミュージック」の基本活動パターン

毎回の「矢南ミュージック」は、活動時間を原則45分間として、ほぼ次のような流れで行われる。このように活動内容をパターンして集会全体を可視化することで子ども自身が活動の流れをイメージしやすくなって「次に何をするのか」を掴みやすくなることから、自ら進んで活動へ参加できるようになる。さらに、全校音楽集会を企画運営する集会委員会やそのサポーターを務める教員の負担軽減にも繋がっている。

#### ① オープニング

集会委員の指揮とピアノ伴奏に合わせて「せかいじゅうの子どもたちが」を歌いながら、全校児童が学年別に体育館へ入場してくる。

#### ② 開始の合言葉

集会委員の先導によって、「矢南ミュージック」タイム開始の合言葉を全員で言う。

#### ③ 今月の歌

集会委員の指揮で、年間指導計画で決められた「今月のうた」を合唱する。あわせて音楽専門の教員による指導も積極的に行われる。

#### ④ 今日の発表

年間指導計画で決められた順序で、各学年またはクラスによる演奏発表が行われたり、合唱部、吹奏楽部の演奏が披露されたりする。

#### ⑤ 歌声タイム

「矢南ミュージック」のコアとなる活動場面であり、音楽専門の教員が前面に出て全校児童へ直接指導を行う。年間指導計画で示された音楽的事項を基本としながら、よりレベルの高い音楽的な指導や活動が行われる。クラス担任教師は、先の「今月の歌」と「歌

声タイム」の指導場面を参考としてクラスへと持ち帰ることで、音楽指導のスキルアップの手助けとする。

#### ⑥エンディング

集会委員の指揮とピアノ伴奏に合わせて「せかいじゅうの子どもたちが」を歌いながら、学年別に順次体育館から退場する。

以上が、平成21年度前期「矢南ミュージック」の指導計画と、毎回の活動パターンである。多くの子ども達がこの全校音楽集会への参加をとっても楽しみにしていることを筆者自身も目で見て耳で聞いて実感しているのだが、そこでは指導の中心を担っている音楽専門の教師だけではなく全ての教師が常に次のことを心がけて指導にあたっているそうである。

- ・「今日は何が起こるだろう？」→子どもの心をくすぐる言葉を常に投げかけるよう工夫する。
- ・「歌ってとても気持ちいい」→まず歌うことに快感を覚えさせる指導を最優先にした指導を工夫する。
- ・「今日もまた上手くなった」→ただ歌うだけではなく、必ず指導とそれに対する評価を直結させて、子どもを認める。

### 4. 「矢南ミュージック」がもたらしたもの

#### 4.1 「矢南ミュージック」によってもたらされた子どもの成長

##### 4.1.1 美しい歌声を求める子どもへの成長

「矢南ミュージック」に関する児童の感想文を紹介することで、活動を通じて子ども達が音楽の美しさについて考え、その美しさを自分なりに求めようとする姿を追ってみたい。実践者の寺島教諭によると、次に示す感想文を記したA子は物事に対して常にプラス思考に行動することができる子どもで、クラスではリーダー的な存在でもある。また授業外でもプラスバンド部に所属して積極的に音楽と関わりを持つなど、音楽に対する興味や関心は高く、音に対する知覚力も優れているそうである。そのため音響的な変化や音楽表現上の変化を聴き取ったり、それを自分なりの言葉で文章へ置き換えて表現したりすることを積極的に楽しもうとしている姿を行間から窺うことができる。

##### ①6月23日の集会後にA子が記した感想

A子による「6.23 矢南ミュージック」へ参加した感想文を原文のまま紹介する。

「朝の矢南ミュージックより長くて内容がパワーアップしていて楽しかったです。学校全体で歌った『翼をください』は、今までで一番きれいで美しい？歌声でした。私は、歌いながらみんなの歌声を聞いて、空へ飛んでいけるような気がしました。5年1組と5年2組の演奏発表は今年初めての発表にふさわしい、すてきな合唱と合奏でした。『いつでもあの海は』は二部合唱で、片方がもう片方につられることもなく、とてもきれいな声で歌っていて、海岸の風景が頭

の中に浮かんでくるくらいすてきなものでした。歌を歌っているとき、二人の男の子が前に転がるくらい前に体を乗り出して歌っているのを見て、『歌やピアノの伴奏を体で感じながら歌っていてすごい！まねしたい』と思いました。他にも左右にゆれていたりに乗り出して歌っている子もいたけど、この二人は特にすごかったです。『威風堂々』では、だんだん楽器の数が増えていき、最後は大音量で、題名どおりの威げんあるすばらしい曲になりました。打楽器がだんだん音が大きくなって、最後で大きな音でどかーんってばく発みたい音がしたところがあり、そこが一番盛り上がっていて、そこが今日の発表で一番感動しました。

最後に歌った『この星に生まれて』は、アルトの音が出なくて、のどが痛くなりました。でも、全校全体でハモったので、とってもきれいな歌声で体育館中がふるえました。退場入場で歌った『せかいじゅうの子どもたちが』は、手拍子をしながら歌い、手が痛くなりました。今までの矢南ミュージックの中で一番いい矢南ミュージックでした。」

##### ②7月1日の集会後にA子が記した感想

同じくA子による「7.1 矢南ミュージック」へ参加した感想文を原文のまま紹介する。途中、活動とは無関係の文章が含まれていたため、その部分を省略した。

「今年2回目の演奏発表。6年1組と6年4組の演奏発表。つまり自分の発表。今日は『市制記念日』ということで岡崎市歌を歌いました。高音で少し歌いづらい音があり、そのたびに声がガラガラになり、うまく歌えませんでした。今度歌う機会があるときはきれいに歌えるといいなあと思いました。演奏発表は『この星に生まれて』をやり、そのときが一番緊張しました。あまり練習期間がなかったので、あまりうまくできませんでした。先生の指揮を見ていたり見に来ていたお母さんや弟の顔を見てみると、うまくいなくても精いっぱいがんばり、今までで一番いい演奏にしようと思いました。少しまちがえたけど、音楽を楽しむ（演奏する）のはいいなあと思いました。～中略～

最後に全校のみんなが教室にもどった後、『この星に生まれて』をもう一度演奏したとき、『これで小学校生活最後の矢南ミュージックでの演奏発表が終わったんだなあ』と思いました。最後の最後で演奏発表した『この星に生まれて』は、本当にいい演奏だったと思います。」

##### ③実践者の寺島教諭によるA子の分析

次に実践者の寺島教諭がこのA子の成長をどのように見守っていたのか、その「とらえ」を教諭自身の言葉から紹介しておきたい。

「本年度で最初の学級発表を迎えた矢南ミュージック。それぞれの子どもが、聴くという活動をいかに機能させているか、また今後どのような手だてを講じる

必要があるかを推し量るには大切な感想交流の場であった。A子は持ち前の鋭い感性で発表を聞いた感想を分析的に書き記している。『海岸の風景…』『楽器の数が増えて…』は予想できるA子の感想である。しかし、どちらかという周囲を意識する経験が少なかったA子にとって、『すごい！まねしたい』は6年生になってから成長した部分ととらえた。

今年から始めた全校合唱。集会の場で音程取りを進めるなど、授業に支障の出ないように取り組んできたが、ずいぶんと子どもたちの歌いたいという意識に結びついてきているようだ。A子の『歌声で体育館中がふるえた』の言葉どおり、全校の歌声がハーモニーを作り始めている。その意識をさらに強固なものにしたいと願い、朱記でそれを伝えた。

7月の記録の『最後の最後で…』の部分から、先週以上に全校合唱に対するA子の感動が強まっていることが読み取れる。集会活動が子どもの学びを確かなものに行っていることが、ここからもわかる。」

#### 4.1.2 互いに言葉で関わり合うことの大切さを実感する子どもへの成長

この全校音楽集会の中で継続しているコンテンツに「感想発表交流の場の設定」がある。これは、演奏発表や活動などに続いて集会委員の司会で低学年の児童から高学年の児童までまんべんなく感想や意見を発表するものである。毎回、低学年から1名、中学年から1名、高学年から1名ずつの3人程度の子どもが選ばれて感想や意見を発表するが、回を重ねるごとに「楽しい、面白い」という情緒的な側面のみを捉えた感想から音楽の特徴を捉えた感想を述べたり、演奏者側の意図や思いを感じ取った意見を発表したりする子どもが増えて、その成長を窺うことができる。さらに、他の人の意見を聞いて自分で気付かなかった点へ注目したり、上級生の感想をモデルとして「意見や感想の持ち方」を学んだり、感じたことを表現する「言い回しや言葉」を真似したりすることで、感じたことを言葉に置き換えて表現する方法を少しずつ学んでいた。

このように演奏発表や活動の後に必ず感想や意見を発表し合う場面を設定することで、演奏表現がままならない低学年の子ども達を活動へ参加させることができる、というメリットもある。そのため、きれいな歌声や上手な演奏を聞かせたいと思っている高学年の発表であっても、必ずこの「感想交流の場」を設定させることで、全ての子ども達が活動に参加できるように配慮されていた。

#### 4.2 「矢南ミュージック」によってもたらされた教師の変化

何度も述べてきたが「矢南ミュージック」の活動は、単なる一行事から「子ども達が日常の音楽科授

業ではなかなか体験できない高いレベルの音楽活動に触れられる場」へ脱却させるとともに、教師サイドへも「音楽専門の教師による指導を見聞きしたクラス担任教師がその指導ノウハウをクラスへ持ち持ち帰られるスキルアップの場」にもなり得ることをめざして行われていた。しかし、音楽を不得意と感じる教師の多くは子ども達の輪の中に溶け込むことに抵抗を感じており、遠くから活動の様子を眺める「壁花族」のようになりがちである。さらに言えば全校音楽集会で子ども達へ悪影響を与えるのは、腕を組んだまま壁際から活動を眺めている「壁際族」の教師の姿であろう。これらの教師は外野的目線から子ども達の悪い部分ばかりを指摘し、自ら音楽に接して心から音楽を楽しもうとする姿を子ども達へ見せようとはしない。これでは子ども達は萎縮するばかりで、音楽活動を楽しみ、浸り、そこへのめり込んでいくことは難しい。このような「壁花族」や「壁際族」の教師にも、子どもと一緒に音楽活動を楽しみ、ともに学び、ともに成長しようという前向きな意識を持ってもらうために、「矢南ミュージック」ではとにかく彼らを活動の中心に引っ張り込み、時には活動の核となる役割を担ってもらうような配慮が為されていた。そして、子どもといっしょに歌うだけではなく、演奏や発表に関する感想や意見を積極的に発言するように促し続けていた。

このように全ての教師へ中心的な役割を担って活動と関わってもらい、「自ら子ども達を引っ張っていくことによって初めて全校音楽集会が成功するのだ」という意識が少しずつ浸透することで、次第に多くの教師から支持と理解を集めるようになった。このような働きかけの結果として、どんな変化が顕れたのかを端的にまとめておきたい。

- 全校音楽集会に抵抗を感じる教師がほとんどいなくなったこと。
- 「壁の花」のように眺めている教師はいなくなり、いずれの教師も子ども達の中に入って一緒に活動するようになった。
- 演奏や発表に対して感想や意見を述べる場面でも、進んで発言しようとする教師が多くなった。
- クラスの授業で、子どもの前に立って指揮をしたり歌ったりしながら指導しようとする教師が増えた。

以上のような「矢南ミュージック」の成果に対して、実践者の寺島教諭による自己評価ではさらに次の点において改善を求めている。

- 各クラスの音楽科授業では、相変わらず「岡崎スタンダード」（地区独自の指導ガイド）と教科書会社などが作成した「指導書」へ依存した、味気ない授業で停滞している例も少なくないこと。
- 音楽活動に役立つ備品や設備が充実している音楽室での活動を奨励しているものの、音楽室の利用率があまり伸びてこないこと。



これらの指摘から、クラス担任の教師は基本的音楽活動や基礎的な指導に関する理解はできているものの、残念ながらそれを発展させて応用的な活動へ子ども達を導くことができるレベルには至っていないことが想像できる。また、音楽室を活用してどんな音楽活動ができるのかを知ったり、音楽室の備品や設備を自在に使いこなす知識や技術を身に付けたりするレベルにも至っていなかったものと判断される。

このような現状を踏まえた上で、寺島教諭による自己評価はさらに次のように続いている。

「まだ矢南ミュージックがクラス担任教師達のスキルアップを支援できる場であるという意識改革は浸透していない。ただ『本校が音楽というコアを持つことによって、子どもの質の向上にも繋がっている』という点は理解して下さっている。だからこそ、授業にせよ、学芸会の音楽発表にせよ、卒業式や祝う会にせよ、音楽の指導力不足で子どもが歌わない、歌えないということは見られないし、各クラス担任教師たちも音楽科の授業に於いては自信をもって子ども達と対峙することができている」

この寺島教諭の言にもあるとおり、たとえ発展途上の面は残っていると看做しても、音楽専門の教師達が「矢南ミュージック」の指導を媒介として伝えたいと企図した「学校全体の音楽レベルの質的な保証と技能の向上」という願いは、確実にクラス担任教師のスキルアップへと繋がっているだろう。そしてその成果も、確かなものとして結実しつつあるものとする。このような「全校音楽集会において模範的指導を見聞きした各クラス担任はその真似をし、そこから学ぶ」という教育改善とスキルアップのユニークな活動が、今後さらに継続的かつ持続的に発展することを期待する。

## 5 今後の課題

実践者である寺島教諭による自己評価では、今後の課題として次のことを指摘している。

「本校の音楽教育、言い過ぎかもしれないが、教育活動全般に亘り子どもが自信を持って事に臨む姿は立派だと思う。その素にあるものはたくさん考えられるが主に次の3つに集約されるだろう。

- ①学校教育活動の一環としての位置づけと、その教育的効果や意義に関する学校長の確かなビジョンとリーダーシップに支えられていること。
- ②音楽の得意／不得意にかかわらず全ての教師が居場所と役割を持って、明るく音楽活動へ参加することができること。
- ③全校音楽集会を運営している教師以外にも、音楽教育や音楽活動に関して深く理解を示してくれる教師集団が存在し、彼らに支えられていること。

本校が、『矢南ミュージック』を通して音楽教育を確かなものに行っていることは、集会で活動に取り組む

子ども達の姿や歌声の質の向上から感じ取ることができている。それは、継続的・計画的な運営や日々の指導法研鑽によって支えられてきたことが大きい。しかし実際には、子ども達や教師の音楽活動に対する思いが大きく膨らんだ結果として、歌声の質などの技能向上や教師の指導技術向上などが花開いているのだとも思っている。音楽を指導する時、どうしても『思い』ばかりが先行してしまう。確かにそれも大切なことなのだが、その『思い』を高めるためには、確かな学びを計画的・継続的に準備して実践することが大切であろう。そのことを全校音楽集会の活動を継続することを通じて再認識した」

そして、これまで積み重ねてきた実践をさらに確かな歩みへと発展させ、子ども達やクラス担任教師のスキルアップを充実させるために必要とされる課題を、次の3点に整理し提起している。

- ①指導や活動のパターン化とマンネリ予防とのバランスをどのように見極めるのか？
- ②子ども達や教師の中に潜在している「やらされている」という意識をどのようにして拭き去るのか？
- ③音楽科授業に対する意識の改革、そして音楽科の授業改善をどのようにリードしていくのか？

この寺島教諭によって指摘された課題を解決する方法の模索は、全ての音楽教育関係者へ投げ掛けられた宿題でもあろう。今後「矢南ミュージック」の活動がより充実発展するとともに、教育界全体に対して「学校内音楽活動のあり方」と「授業改善と教師のスキルアップの新しい姿」を問うオピニオンリーダーとして、さらに一石が投げられることを期待している。

## おわりに

本報告では、全校音楽集会を「子ども達がよりレベルの高い音楽活動に触れることのできる場」へ発展させるとともに、「音楽専門の教師による指導ノウハウをクラス担任教師が持ち帰ることができるようなスキルアップの場」として活用する実践を継続して積み上げてきた愛知県岡崎市立矢作南小学校の実践をレポートした。この実践では全校音楽集会を学校内教育活動のコアの一つと位置づけて、音楽専門の教師が積極的かつ戦略的に活動へ関与したことにより、子どもの音楽レベルの質的な保証と技能向上を図るだけでなく、クラス担任教師のスキルアップも企図され、それらの効果は児童と教師の垣根や授業の枠を越えて広く学校内音楽活動全体へと波及していた。その結果、「子ども⇔子ども」のみならず「子ども⇔教師」、「教師⇔教師」の間でも互いに協力し刺激し合う「共働」、「共創」、「共感」、「共有」をめざした活動が、長年に亘り持続的かつ継続的に繰り広げられることとなった。

そこでは、ストレス・フリーに音楽の知覚力（知識と技術の両面）を身に付け、それを使いこなして「共

働・共創・共感・共有することを楽しむ」という、筆者が理想として思い描く音楽科授業の姿を垣間見ることができた。さらに、「思いや意図」を文字や言葉によって他者へ伝えるのと同じように音や音楽によって伝える「演奏表現の技術（伝える技や方法）」やその指導方法についても、各クラス担任が持ち帰って試してみることが可能になっており、筆者の懸念を解決する方策へヒントを与えるものもなった。今後も、このように様々な垣根を取り払って学校全体へ真に有益な影響を及ぼしていくような教育活動に注目し、筆者の視点から積極的に紹介していきたい。

報告を終えるにあたり、「矢南ミュージック」の教育的意義や効果を振り返ることで、まとめとしたい。

- ①音楽専門の教師から子ども達が直接レベルの高い音楽指導を受けることができる。(質的レベルの保証と技能的レベルの向上)
- ②音楽を専門とする教員による指導法や活動をモデルとして、各クラスに持ち帰って試したり実践してみたりすることができる。(教師のスキルアップ)
- ③「思いや意図」を音や音楽によって伝える演奏表現の技術（伝える技や方法）が例示され、その指導法や活動を提案する。(教師のスキルアップ)
- ④「子ども⇔子ども、子ども⇔教師、教師⇔教師」で取り組む「共働、共創、共感、共有」。

文末になったが、実践を研究組上へ取り上げて本報告で紹介することをお認め頂いた愛知県岡崎市立矢作南小学校の市川修学校長と寺島真澄教諭に深く感謝するとともに、岡崎市教育委員会の山本知子指導主事を初めとする関係各位にも篤く謝意を表したい。

#### 参考文献および資料

- \* 梅本堯夫「子どもと音楽、シリーズ人間の発達2」、東京大学出版会、1999
- \* 大谷和明「組織力ある学習集団をつくる」、明治図書、2004
- \* 高旗正人「自立と共生の心を育てる小集団学習」、黎明書房、2002
- \* 田中和代、「教師のためのコミュニケーションスキル」、黎明書房、2005
- \* 坪能由紀子・伊野義博「小学校学習指導要領の解説と展開」、教育出版、2008
- \* 吉本 均、「新版現代学級集団づくり入門」<班づくり、リーダーづくり>、東方出版、1983
- \* 吉本 均、「現代学習集団づくり講話—子どもを“学習主体”として立ち上がらせる《学習集団》の技術体系—」、現代学級経営研究会「現代学習集団入門講座」、東方出版、1983
- \* 文部科学省「小学校学習指導要領解説音楽編」、教育芸術社、2008
- \* 文部科学省「中学校学習指導要領解説音楽編」、教育芸術社、2008
- \* 拙著、「グループダイナミクスを活かした『イメージングを通して音楽表現を創り上げる活動』の模索—課題を見つけ出す力と問題解決の段取り力を育む2つの実践を軸として—」、愛知教育大学研究報告第55号、2006、pp. 1-11
- \* 拙著、「イメージングを手掛かりに生徒の主体的聴取をめざした「能動型鑑賞授業」の模索—教え込むから導き出すへ、ヘルプからサポートへ：ビジネスコーチングスキルの応用—」、愛知教育大学研究報告第56号、2007、pp. 1-11
- \* 拙著「言語活動の充実と音楽科」、初等科音楽教育研究会編「初等科音楽教育法・小学校教員養成課程用」、音楽之友社、2009、p.134
- \* 拙著「言語活動の充実と音楽科」、中等科音楽教育研究会編「中等科音楽教育法・中学校教員養成課程用」、音楽之友社、2009、p.136
- \* その他、「AUE Repository（愛知教育大学電子図書館）」に収録された拙論も参考にされたい。Repositoryの中での拙著の検索方法は次のとおり。  
「<http://repository.aichi-edu.ac.jp/>」→「著者で探す」をクリック→「shinzanou」を入力して検索をクリック